

小島烏水「鎗ヶ嶽探険記」論

——要請された「その土地特有の景象」について——

熊谷昭宏

はじめに

明治時代後半という時期、著名な作家で紀行文というジャンルの担い手となっていたのは、大町桂月、遅塚麗水、大橋乙羽、幸田露伴といった人々であった。そういった紀行文家たちのものも含めて、紀行文は、同時代においては、主に「文章」（あるいは「文字」といった評価軸に沿って評価されることが多かった^①。この時期の紀行文は、いわゆる美文というジャンルに包含されるものと一般には考えられていた。紀行文Ⅱ美文というスタンダードな図式についてはしかし、明治三〇年代後半から四〇年代初頭にかけて、徐々に疑問を抱く人々が現れ、時には否定すべきものとして語られるようになっていった。

小島烏水は、そのような美文としての紀行文への疑問を比較的早

い時期に投げかけた人物の一人である。烏水は明治三〇年から投稿雑誌「文庫」の中心的な記者・編集者となり、同時代文学の批評を行う傍ら、精力的に紀行文を発表している。彼が理想的な紀行文について論じたのが、明治三六年「文庫」に発表された「紀行文に就きて」（第二三巻第六号／一九〇三年八月一日、第二四巻第二号／一九〇三年九月一日）という論考である。これは紀行文についてはほとんど実作専門であった烏水が、初めて本格的に紀行文を小説等と並ぶ文学の一ジャンルとしてとらえ、論じたものである。この論考では、従来の紀行文の評価基準に疑問を投げかけ、「写生」をキーワードとして、「文章」「文字」などとは異なる新たな評価基準を導入しようと試みている。その試みは、後に田山花袋をはじめとした日本の自然主義作家たちが、「地方色」や「ローカルカラー」を小説中で再現しようとした試みにも通じるものであると考え

られる。また、この紀行文論が、烏水自身の紀行文「鎗ヶ嶽探險記」連載中に発表されたということも、興味深い事実である。

本稿では、小島烏水の紀行文「鎗ヶ嶽探險記」と紀行文論「紀行文に就きて」で想定された紀行文の理想の姿と、実践に際しての矛盾を明らかにすることを指す。そのうえで、これらの考察を、明治三〇年代末から四〇年代の紀行文をめぐる状況と諸問題を整理する足がかりとするつもりである。

一 紀行文を改稿すること

小島烏水の「鎗ヶ嶽探險記」全十章は、明治三六年一月から二月まで「文庫」に九回にわたり連載（第二二巻第二号／一九〇三年一月一日〜第二四巻第六号／一九〇三年二月二十五日）され、三年後の明治三九年七月に刊行された紀行文集『山水無盡蔵』（一九〇六年七月三日／隆文館）に収録されている。ここで興味深いのは、初出本文と『山水無盡蔵』収録本文との間に、大小様々ではあるが、多くの異同が存在しているということである。異同の存在自体については、大修館書店版『小島烏水全集』第四卷（一九八〇年三月二十五日／大修館書店）の解題・解説で近藤信行が既に指摘をされていて、大規模な異同については具体例も挙げている。両本文間の異同を比較すると、改稿部分にはいくつかの傾向が認められるのだが、本稿

で注目したいのは、高山植物や山岳の標高等に関するもの、第十章の後に付けられた「拾遺」に代表される、補足的な情報に関するものである。例えば初出第九章では、岩場に咲く草花について「キバナスミレ、クルマユリなどの簇がり咲くを観る」という箇所があるが、同じ箇所は「山水無盡蔵」では「キバナノコマノツメ、タカネスミレ、クルマユリなどの簇がり咲くを観る」と改められている。ほかにも、「我等の上を覆ふものは樅や母にして」の「樅や母」が、「白檜の短木」と改められている例（第七章）がある。植物の名称に対する烏水の配慮には並々ならぬものがあつたようである。「文庫」への発表以前に、専門家への問い合わせを行っていたことを、近藤信行が指摘している^③。連載中にも、例えば第五章末尾で、信濃嶋内村の胡桃勘内という人物から寄せられた地名等の誤りを指摘する投書を紹介し、「尚ほ今後ともかゝる指教を与へられむことを諸君に乞ふ」と読者に呼びかけている。「鎗ヶ嶽探險記」は「文庫」連載の時点から、神経質なまでに〈正確〉な記述を目指して書かれていたのである。

そもそも高山植物の固有名詞を用いる程であるから、その用法への配慮があるのは当然のことかもしれない。だがこの配慮を、記述が〈正確〉であるか否か、すなわち記述内容の正誤への関心と捉え直すと、問題は少々複雑になる。この正誤への関心は、「拾遺」に

記された諸情報からも読み取ることができる。『山水無盡蔵』収録時にかんがりの加筆があった「拾遺」の末尾には、このような言葉が加えられている。

日本山嶽の跋涉としては、自ら探險エキゾレーションと称するとも、舞文誇張を以て目せらるゝ、虞れなきを得むか、我は単に鎗ヶ嶽の表山を片面的に上下したるのみにあらざればなり、この附近の山嶽と谿谷とを熟知するものは、余が言に首肯すべきを信ず。

これは、「鎗ヶ嶽探險記」発表直前、「文庫」に掲載された予告文（第二巻第一号／一九〇二年二月一日）の「本州にありては是れ以上の冒険なきことも、亦著者の自信するところ」という言に対応している。また数年後、片上天絃、水野葉舟、吉江孤雁、前田

木城による合評「今の紀行文家（合評）」（『文章世界』第二巻第一号／一九〇七年一月一日）で孤雁が批判する、明治三〇年代までの「不便を侵して行つたといふ事が誇りともなつて、単に為た事実を書いた」タイプの紀行文に特徴的なスタンスということにもなるだろう。しかし、本稿で論じたいのは、「探險」それ自体ではなく、書かれた「探險」、つまり記述内容の検証可能性とその強調についてである。「鎗ヶ嶽探險記」第二章では、日本アルプスの山々の標高が列挙されるが、『山水無盡蔵』ではそれが軒並み修正される。また、「拾遺」で示された「余」登頂後の槍ヶ岳の登山記

録も更新されている。このような形の改稿は、美文的紀行の場合にはほとんど必要ではなかったはずである。「鎗ヶ嶽探險記」は、明治三九年の時点でも未だ言文一致がとられていないため、表現レベルでは、明治の一般的な美文的紀行文の系列に属しているといわざるを得ない。だが、紀行文における現実の参照という問題を考えた場合、「鎗ヶ嶽探險記」は同時代の紀行文の中でも際立った特徴を示している。これらの改稿に正当性を与えるのは、紀行文の記述は現実と（正確）に対応すべきだという前提条件だろう。これは紀行文というジャンルの根幹を規定する重要な約束事であるといえる。烏水は改稿によって、その約束事を厳格に守り通そうとしていたのだ。

ところで、「拾遺」に加筆された記述の中には、「この道、近來大に拓け、山麓梓河畔に湧ける温泉の傍には、宿舍さへ建ちて、客を容るに至りしと聞く」という箇所が見られる。これも、登山口周辺の景観の変化に言及するという、一種の現実の参照として説明できる。ただ、この記述は本文中の上高地の描写には反映されず、あくまでも「拾遺」として付加されているに過ぎない。これは、現実を参照するという約束事から派生する、「案内」という紀行文のもう一つの性質によるものだと考えられる。例えば、理学士山崎直方は、明治三九年六月の「文章世界」特集に、「旅行記の書き方」（第一巻

第四号／一九〇六年六月一日）という文章を寄せている。同特集には烏水も「山岳地の旅行」という文章を寄稿しているが、そこで山崎は紀行文を書く際の注意点を、次のように述べている。

人はよく紀行文を書く場合に、誇大なことを云つて見たり、瘦せ我慢を書いて見たりしたがる。（略）後の旅行家に迷惑を蒙らすことは非常である。例へば一日に行けるつもりの方が、実際一日に行けなかつたりするので、始めの計画に齟齬を来させる。

山崎は、「學術上の探検とか、実業上の取調とかいふもの」ではなく、あくまで「普通一般の漫遊旅行」を旅行記や紀行文として記す場合に、右のような注意が必要だとしている。そのため、「趣味がある」ことや「感興」を盛り込むことは否定されない。ただし、紀行文作者は、現実を参照する読みを常に想定し、「案内」としてそれに耐え得るものを書く必要があるとしたのである。山崎は「正確」な記述を、紀行文を書く者のモラルであると説いたのだ。この点で烏水は山崎に近い立場にあるといつてよい。例えば、「鎗ヶ嶽探險記」で、足袋など登山の必需品が本文終了後に改めて「拾遺」に記されているのも、このようなモラルへの配慮があつたためである。

しかし、このモラルのみに注目し、紀行文においては、旅行「案

内」の精度を上げることが要請されていたと指摘するだけでは十分ではない。確かに、〈正確〉な記述は、紀行文をより〈正確〉な「案内」として機能させるという目的をある程度は満足させることができるだろう。だが烏水の場合、記述の〈正確〉さ自体を希求するという傾向が見られるのである。「鎗ヶ嶽探險記」の場合には、「後から旅行する」読者への登山「案内」が「拾遺」に集約され、「余」の登山の記である全十章の本文とは異なる機能を有している。「拾遺」という明確な「案内」と切り分けられた全十章の本文は、「余」の「感興」の表現と〈正確〉な記述の混淆が試みられた結果であつた。

二 「その土地特有の景象」

明治三〇年代後半の日本では、主に植物学を修めた知識人らによつて、登山の記録が多く残されているが、だからといつて登山が一般庶民から広く「趣味」として認定されていたわけではない。雑誌「博物之友」などに掲載されたのは、あくまで少数の知識人たちの採集登山記であつた。^⑤ 烏水自身も、槍ヶ岳登山の計画が発覚した際には、「土地の測量、地質の調査、植物の採集などが、その職（第一章）でもないのに危険を冒すといふことで、父親に猛反対されている。しかし、彼が「鎗ヶ嶽探險記」に高山植物や知名度

の低い山々の名を記し、その記述が少しでも誤っていれば最終的に書き改めたのは、そのような時期である。書齋に居ながらにして想像上の旅を経験する、アームチエアー・トラベルという文化的行為を考えてみてもそれほど効果をあげるとは思われぬ。例えば、遅塚麗水の『日本名勝記』上下巻（上巻は一八九八年八月一三日、下巻は同年九月二七日／春陽堂）を紹介した「山の奇なる、水の清き、一読の下身自ら其境に遊ぶが如し」という文や、鳥水自身の著作である『不二山』（一九〇五年六月一日／如山堂書店）を評した「読む人をして往神縹渺として雲に駕し風に御して其地に遊ぶがごとき想あらしむ^⑧」という文を考慮するならば、「鎗ヶ嶽探険記」の改稿がアームチエアー・トラベラーの想像力を一層刺激するとは考えにくい。一般的に重要視されたのは、「山の奇なる」「水の清き」という、漠然としているが魅力的な「山水」イメージである。そういった「山水」イメージの形成のためには、高山植物の名称等の細かな変更は、瑣末な問題になるだろう。鳥水自身前出の「山岳地の旅行」で、少年時代に近世の旅行案内記の類を読んで、富士山や中仙道に「行きたくて、行きたくて、堪まらなく」なつたと回想している。

それでは、彼のこだわりは一体どんな理念に基づくものなのか。この疑問に対する答えの一つが、「鎗ヶ嶽探険記」連載中、同じ

「文庫」に発表された「紀行文に就きて」であろう。同時期に連載中の自身の紀行文を強く意識したと考えられるこの紀行文論ではまず、旅行を素材にして文章を書くにはどうすればよいか、という問題を提起している。そして、そこから鳥水独特の紀行文論は展開される。「紀行文に就きて」では、キーワードとして「写生」という語が多用され、これを理想的な紀行文を書くための重要な方法であるとしている。「写生」の利点については、

写生そのものは模写であるから、いかに拙くとも、忌や味も、気障も銜気もなく、唯だ幼稚といはれるぐらゐに過ぎねば（略）誰にも出来るとおもふのである。

と述べている。「模写」という語を引き合いに出していることから、その理解の度合いは別として、絵画における「写生」をモデルとして設定していたことがわかる。とくに、屋外風景のスケッチや水彩画を得意としていた同時代画家たちの「写生」が想起される。また、「写生」を用いた文章、つまり「写生文」については、「写真」との比較から、

繁を欲すれば繁、簡を欲すれば簡、九を略して一を存するも可、特点を挙げて通有点を没却するも亦可

という理解を示しており、ここからは、「写生」には「固より多少の取捨選択を要す^⑩」とした正岡子規や、子規没後に分化していった、

「ホトトギス」同人たちの「写生」論との同時代的な共通見解をも読み取ることができよう。このように烏水はいとも簡単に「写生」の定義を行うのだが、続いて何を「写生」すべきかということ、が問題にされる。烏水は、紀行文を書く者がとるべき態度について、次のように述べる。

旅行といへば、既に何の山、何の川と、特指せられた土地の上に立つのであるから、その土地特有の景象があらねばならぬ、

(略) 地質からいへば火山岩もあらう、花崗岩もあらう、石灰岩もあらう、(略) その真を摸さなければ活き得ぬところである。右の引用部分は「紀行文に就きて」で最も特徴的な箇所である。

「その土地特有の景象」は、後に田山花袋など自然主義陣営の論客が好んで用いることになる。「地方色」「ローカル、カラー」という概念にも通じるものである。だが、花袋は「ロオカルをだすといふことは人物と社会とを描くことである」として、「ローカル、カラー」を小説の登場人物と社会の描写に関係付けている。烏水のいう「その土地特有の景象」は、花袋的な「ローカル、カラー」とは少し異なり、風俗・習慣・方言等に加えて、火山岩や花崗岩、洪積層といった、地質のバリエーションまでが要素として含まれている。「その土地特有の景象」についてのこうといった考え方は、『山水無盡蔵』刊行の翌年、「文庫」に発表された「紀行文論」(第三五卷第二

号／一九〇七年九月一五日)でも引き続き押し進められることになる。

片麻岩といつて直ぐ領れぬうちは、自分の立場は、大に困難であると言はねばならぬ、しかしして、片麻岩は、珍奇稀有な石であるとかいふなら格別、天竜川沿岸から、木曾地方にかけて、本州中央の豪宕なる風景は、大部分この石で作られてゐるのである

風景の「豪宕」さを「片麻岩」と関係づけて語ることが、「本州中央」という「土地特有の景象」を描くことにつながるというのが、烏水の主張である。彼は、漠然とした「山水」イメージの解体を讀者に要請している。同時に「豪宕」といった風景の表現を、「片麻岩」とその性質を語り解析することこそ紀行文の風景描写であるという、彼の考えも見て取れるだろう。三ヶ月後に発表された「紀行文小論」(「文章世界」第二卷第一四号／一九〇七年二月一五日)でも、

科学上の智識を疎かにして、物を比較的に正視することは、格別に眼の鋭敏な人を除いて望まれ得ることで無いやうに思はれる、(略) 今までのやうな、空疎な自然の観察で誰が満足してゐられやう。

という見解が引き続き示されている。

ここまでできて気がつくのは、「鎗ヶ嶽探險記」では「拾遺」等に「案内」への配慮が示される一方で、「その土地特有の景象」の再現に努めることによって、「案内」や現実参照を超えた記述が志向されているということである。「紀行文に就きて」などによれば、地理や地質、植物等に関する知識が、紀行文作成のためには不可欠だということになる。これは、紀行文の「案内」としての信頼性を高めるために構築された論ではないだろう。それよりも、各所の記述が「正確」であること、とりわけ、同時代の自然諸科学の知識に照らして「正確」であることを保証する方法であると考えられる。このような「正確」さへの執着は、同時代の遅塚麗水や大町桂月といった美文寄りの紀行文家たちのスタンスや、後の花袋らの「地方色」概念と比べて、ある意味ではラディカルだといえよう。烏水の唱える「写生」とは、地質などを含めた様々な要素によって形成される「その土地特有の景象」を、科学的知識と矛盾しないという意味で、「正確」に再現することを目指す行為だと言い換えられる。これを「鎗ヶ嶽探險記」に引きつけて考えるならば、「指教を与へられむことを諸君に乞ふ」という読者への呼びかけも、「キバナスマレ」を「キバナノコマノツメ」と書き換える高山植物へのこだわりも、「その土地特有の景象」を現実≠知識と比較して「正確」に再現するための試みだったことがわかるのである。

三 知識と紀行文「作法」

科学的知識に基づき「正確」に改稿された「鎗ヶ嶽探險記」を収録した『山水無盡蔵』は、発行当時においては、従来の紀行文集に対する場合と同じ基準に沿って評価されることが多かった。そんな中、それまでの紀行文集に対する評価にはみられなかった、「其詩趣に加ふるに科学的分子を以てせる」、「信州の山岳、及び「飛騨縦断記」中飛州の諸川を研究紹介せり^⑮」といったコメントが少なからず与えられているということには注意したい。紀行文が評価されるポイントとして、「科学的」であることと、「研究」的であることが加えられたのである。

ところで、「その土地特有の景象」の再現は、同時代の紀行文「作法」の類でも、「作法」の一つとして紹介されることがあった。例えば、明治四〇年に刊行された西村酔夢『通俗作文全書第六編』紀行文作法（一九〇七年二月二八日／博文館）では、天文学や地文学の知識に基づく記述を「科学的叙述」と名づけ、これを「普通の記述よりも却つて趣味深く、理解を確実にし、印象を明瞭にするもの」であるとしている。また、「地勢を叙するに当りて岩石の種類、土地の性質、山河の特性に関する科学上の意見を表現するが如き」紀行文を、「進歩したる形式の紀行文として、将来に飲

迎せられるべきもの」としている。¹⁶ 烏水と酔夢に共通するのはやはり、紀行文には自然科学の知識が積極的に反映されるべきだとする見解である。このような見解に基づけば、紀行文では「見たまま」の「写生」であることに加え、「見たまま」にどれだけ科学的裏づけが与えられるかが重要になるのは当然である。「科学的」あるいは「研究」的という表現を用いた一部の『山水無盡蔵』評も、このような新しい「作法」に対する反応であるといえる。一方で、「科学上の智識」を強調する烏水の姿勢に対しては、「術学的」傾向を難する「今の紀行文家（合評）」における前田木城の批判もあった。木城はまた、風景描写の在り方についての自論を展開するといった、「紀行文で論じる」姿勢をも批判している。このような批判は、明治四〇年に刊行された紀行文集『雲表』（一九〇七年七月一日／左久良書房）を直接の対象としている。だが、「紀行文で論じる」ことへの批判などは、結果的に「鎗ヶ嶽探険記」第二章（地理上より見たる鎗ヶ嶽」を論じる）なども射程に入れることになるだろう。

もちろん、文学作品の風景描写に「科学的」知識を盛り込む試み自体は、ひとり烏水のみが取り組んだことではない。例えば、志賀重昂の『日本風景論』（一八九四年一〇月二四日／政教社）で提唱されて以来、風景の様相を決定する要素としての水蒸気への関心が

高まった。美文の大家大町桂月も、描写対象である風景を、水蒸気を考慮に入れながら観察すべきであることを、その名も「紀行文作法」（『成功』第一〇巻第四号／一九〇六年二月一日）という文章の中で説いている。ジョン・ラスキンの絵画論に触発された島崎藤村の雲の描写も、一連の試みのひとつとして位置づけられよう。田山花袋も、小説における「ローカル、カラー」を論じる際に、「地理学上から」みた人間の「発達習慣気分」の違いを指摘し、小説の描写に人文地理学の知識を盛り込むことを試みている。¹⁹ しかし烏水の言う「その土地特有の景象」は、彼の紀行文論に注目するならばより直接的であった。また、その実現のためには、「紀行文論」において、

一般智識の程度から言つて、自分の描いたものが、科学的と見られるほどの、現代の没智識を、自分は、率直に痛切に哀しむのである。

と主張するように、紀行文の読者と作者の「科学上の智識」が共有される必要があるとされたのであった。烏水の企図した新しき紀行文「作法」は、新しき紀行文読書「作法」でもあったわけである。紀行文を読む者にとっても書く者にとっても、「科学上の智識」は教えられる「作法」として想定されていたのだ。

それでは、一文学ジャンルとしての紀行文のアイデンティティは、

どのように確立されようとしていたのか。「科学上の智識」を盛り込んで記述された紀行文に関して烏水は、それがあくまでも文学の一ジャンルとして認識されることを望んでいた。例えば、明治四〇年刊行の『雲表』に対しては、「文庫」誌上で「科学的要素を加味して、所謂応用文学の実を挙げんとする」という評価が与えられた。これに対して烏水自身は「紀行文論」で、「応用文学の実を挙げやうなどは、少しも思つて居らぬ」「元来科学と文学の調和などいふことは、創作の上に、行はれ得べきものでない」という弁明をしている。風景描写は、自然科学の知識に照らして〈正確〉である必要があり、「科学的要素」は描写の前提に過ぎないというのが、烏水の考え方（少なくとも、「紀行文に就きて」や「紀行文論」等では）であった。そして、問題は紀行文における描写にとどまらず、隣接するとされる他のジャンル、特に小説との対比に発展している。次に引用するのも、「紀行文論」の一部分である。

自分が人間を描かないといふ理由は、殊に人間といふ、微妙なる自然物体を心理的に活動させるものに、戯曲や小説といふ適当したる形式がある以上、紀行といふ補助形式を借る必要はさまで多くはあるまいと思ふからである

右の文章からは、烏水がジャンルとしての紀行文が成立する根拠を、小説との対比から説明しようとしていたことが窺える。ただし、紀

行文と小説との比較は、描写の対象に関する、「人事」小説／自然「紀行文」という極めて単純な対立を設定し、その対立を前提として行われていた。この図式的なジャンル規定は、極めて曖昧かつ不徹底であると言わざるを得ない。事実、同時代の「作法」書や「文範」類では、紀行文があるジャンル（例えば「写生文」等）の低位ジャンルとして紹介されている場合が多い。烏水のジャンル定位の試みは文壇においては明らかに失敗に終わっているのだ。²²⁾

四 槍ヶ岳の博物誌と紀行文

『山水無盡蔵』刊行の二ヶ月余り後、槍ヶ岳に関する興味深い書物が出されている。長野県松本市で出版されたその書物の名は『槍ヶ岳乃美観』（一九〇六年九月二八日／高美書店）で、著者は丸山文台、高島畔園、野本紫竹の三名である。内容は、彼らが明治三七年に行つた槍ヶ岳登山の様子を文章化した「登山日記」が中心で、全六編及び「附録」という構成である。全体としては、槍ヶ岳周辺の総合案内書という性格を有している。ここでこの書物に注目するのは、「槍ヶ岳探険記」で烏水が一篇の紀行文という形で試みた、槍ヶ岳周辺「特有の景象」の再現が、複数の項目に分けるといふ形でなされているためである。『槍ヶ岳乃美観』と『槍ヶ岳探険記』および烏水の紀行文論を突き合わせることで、紀行文に常につきま

とつていた、「案内」とジャンル定位の問題が再浮上してくる。

『槍が嶽乃美観』の「緒論」を見ると、著者たちの狙いは大きく分けて二つあったことがわかる。ひとつは、「余等の不文秀筆、到底神容靈姿の、万一を写す能はざるを憾む」という言葉にあるように、槍ヶ岳の「美観」を「写」し、読者にアームチェアー・トラベルの楽しみを与えるということである。もうひとつは、「片々たる此小冊子、霊山探険の一件侶たるを得ば、編者の本懐何ものか之に過ぎん」という言葉が示すように、実際に槍ヶ岳登山を企てる読者のための案内書にしたいということである。どちらとも同書の重要なコンセプトである。第一編「登山の必要を論ず」では、読者に対して登山の有益な点が熱烈に説かれる。最も分量の多い第二編「登山日記」は、「槍ヶ岳紀行」と呼ぶにふさわしい紀行文である。山中で出会ったアメリカ人とのやりとりや、下山途中に牛の群れに遭遇したなどが描かれる。比較的ユニークなエピソードが連続する点では、饗庭篁村の「木曾道中記」(『東京朝日新聞』/一八九〇年五月三日)同年七月三日)や幸田露伴の『枕頭山水』(一八九三年九月一日/博文館)に収められた「まき筆日記」あたりの、明治期にごく普通に見られる紀行文を想起させる。第三編から第六編が槍ヶ岳周辺の動植物や岩石の紹介、当時登山者に注目され始めていた上高地の概説、槍ヶ岳開山者播隆の略歴紹介で、最後に登山の必

需品の紹介などが「附録」として記されている。例えば、第四編「槍が嶽の岩石」では、

一、花崗岩又御影石
 い、区域。頗る広大なる地域を占領す。
 ろ、主成分。石英、正長石、雲母。

は、副成分。角閃石或は輝石少量の斜長石。

という記述がなされる。これは、植物・岩石採集愛好家のための情報を、ある土地を複数の項目に分けて記述する、同時代の旅行案内書の形式を用いてまとめたものであろう。また、この記述は、槍ヶ岳の博物誌ともいえる。この書物について烏水は、自身も創設に関わった山岳会の機関誌「山岳」の「新刊批評」欄に、『槍ヶ嶽の美観』評という形でコメントを残している(第二年第一号/一九〇七年三月五日)。そこで彼は、著者らが「一山嶽のために、是れほどの書を作りたる熱心」を認めている。しかし、引用した文章等の「出所を、一々明記して」いない点、「文章の蕪雜冗漫なる」点を指摘する。そして、「本書に取るところ、先づ是に在り」としたのが、第三編「槍が嶽の生物」と第四編「槍が嶽の岩石」であった。烏水の書評は、槍ヶ岳の案内書にして、博物誌的記述の施された書物に対して与えられたものである。だが、彼が示した『槍が嶽乃美観』の著者らへの要求は、自身が同時代の紀行文に対して期待したもの

と、ある部分で一致する。つまり、知識に基づく「その土地特有の景象」の〔正確〕な記述である。再び「鎗ヶ嶽探険記」に戻って考えれば、そこにはやはり植物、岩石等に関する記述による「その土地特有の景象」再現の試みがあり、一篇の紀行文の本文中で、それは表現される必要があった。「檜が嶽乃美観」では「登山日記」を含めた各編で「その土地特有の景象」の紹介が多角的になされ、烏水の紀行文とは袂を分つことになっているのである。

鎗ヶ岳登頂を果たした明治三五年、烏水は「文庫」に「登山案内を募る文」(第二〇巻第五号／一九〇二年七月一日)という文章を発表している。これには「山に対する趣味嗜好を啓発し、又之に由りて渉水のために舟筏となり躋山のために駕輿となる」という目的があったが、「登山案内」と彼の目指す「文芸の土台に立脚して、判断して欲しい」(「紀行文論」)紀行文とが、どの程度接近したものであるかがよく示されている。募集する「登山案内」で示すべき項目の一つ「登山」については、次のような条件与えられている。

- 一 登山 宿舎の名、登山の準備、導者の有無、備錢、山麓山腹の光景、動物、植物、溪流、絶壁、幽谷、瀑布、洞穴、気候、天象等、成るべく詳悉を要す。

右はあくまで「登山案内」の一項目だが、登山の対象を鎗ヶ岳とし、いくつかの項目を立ててまとめあげれば、「檜が嶽乃美観」とほぼ

同じ書物が完成するはずである。また、一篇の紀行文という形式で「余」の旅行・登山を描くことで条件を満たすならば、「鎗ヶ嶽探険記」に類する紀行文ができるだろう。「鎗ヶ嶽探険記」第九章では、鎗ヶ岳山頂に立った場面の記述にこのような箇所が見られる。

おもへらく、自然は地に在りて絶大至高なる記念碑を建てぬ、美なるかな蜻蛉洲、その崇高美は一に萃めてこゝなる中央大山系に存す

「崇高美」を日本アルプスに見出すのは、登山をする「余」である。烏水の紀行文では、「余(余等)」の旅行・登山を描くという前提を示すということが、紀行文とそうでない文章とを切り分ける作業となっている。「紀行文論」で烏水が持ち出してきた「文芸の土台」という基準も、「鎗ヶ嶽探険記」と「檜が嶽乃美観」とを切り分ける「余」という前提に存すると考えられる。紀行文における「余」とは、換言すれば、「その土地特有の景象」を描く文章を文学の場での賭金とするための条件であったということになるだろう。しかし、そのようなジャンル規定は非常に曖昧であるし、小説という強力な隣接ジャンルとの切り分けを行うことが非常に困難であることはいくつまでもない。そこで持ち出されたのが、「人事」小説／自然「紀行文」という極めて単純な対立だったわけだが、この図式は到底小説作家と読者に対して説得力をもつことも、小説というジャン

ルの在り方を変化させることもできなかった。だが、烏水が「文芸の土台に立脚して」行おうとした紀行文刷新の試みは、紀行文という曖昧なジャンルが、案内書や地誌という「文芸の土台に立脚して」いないテクスト群といかなる距離を保っているかを、彼自身が測定する契機となった。

おわりに

紀行文家であった小島烏水は、アームチェアー・トラベルの魅力を十分に知っていた作家の一人だった。しかし、「紀行文に就きて」において、「写生」という概念を用いて提案されたのは、漠然と「山水に遊ぶ」ようなアームチェアー・トラベルではなかった。「紀行文に就きて」では、「アームチェアー」を離れて書かれた土地を旅行する読者と、「アームチェアー」に留まりながらも「科学上の智識」に基づく「正確」な記述を求める読者へのアプローチが問題にされる。烏水及び彼の読者は、紀行文で書かれた内容の〈真偽〉を問い、記述内容が〈真〉である紀行文、つまり「その土地特有の景象」を可能な限り表現した紀行文を期待するだろう。このような紀行文論が、小説と拮抗し、同時代の美文的紀行文をマイナーな存在にしよう程の強度を持っていたとは言いがたい。だが、紀行文の記述を〈真偽〉という基準に沿って評価する試みは、記述内容

が〈偽〉である紀行文を括り出すという画定作業を必然的に伴っていた。また、烏水が提唱した新しい紀行文の在り方は、『鎗ヶ嶽美観』等の「案内」の記述に近いものであった。彼はあくまでも紀行文が「文芸の土台に立脚」すること、そしてその土台から評価されることを望んでいた。その場合、皮肉なことに紀行文は、〈正確〉な「その土地特有の景象」の記述によってではなく、旅をする「余」の感興が取捨選択の結果適宜「取」られることで、かろうじて「文芸の土台」を確保できていたはずである。「鎗ヶ嶽探險記」発表後、烏水は自らの紀行文論に基づく紀行文の執筆に挑戦していく。そして、『山水無盡蔵』を刊行した明治三十九年以降、挑戦の場は、「文芸の土台に立脚」した雑誌で、長く自身が編集の中心であった「文庫」から、山岳会機関誌「山岳」へと移行していった。その結果、彼の紀行文刷新の試みは、山岳紀行文という奇妙な紀行文の一形態を定着させていくことになるのだが、その発端には、紀行文というジャンルの位置付けと刷新を試みる静かな動きが連続してあったのである。

注

- ① 後に美文に対する異議申し立てを行う小島烏水も、明治三〇年代前半までは、美文的紀行文の人として評価されていた。例えば、紀行文集

『銀河』（一九〇一年八月一八日／内外出版協会）に於ては、「大阪毎日新聞」の「新刊紹介」（一九〇一年八月三日）において、「典雅穩健にして優に一家を成す」「清新の文字蓋し驛旅枕頭の好伴侶なるべし」というコメントが与えられている。

- ② 「鎗ヶ嶽探險記」に先立つ鳥水の紀行文には、「浅間山の煙」（『文庫』第一三巻第六号／一九〇〇年一月一五日）や、「蛇足紀行」（『文庫』第一九巻第五号／一九〇二年二月一日、同第一九巻第六号／一九〇二年二月一五日、同第二〇巻第二号／一九〇二年四月一五日）などがある。

- ③ 近藤信行『小島鳥水——山の風流使者伝』（一九七八年一月三日／創文社）

- ④ 鳥水らにより設立された山岳会も、初期には日本博物学同志会の会員が中心を担っていた。日本博物学同志会は、東京府立一中の動植物研究グループを中心にして明治三年に発足した。山岳会設立に尽力した武田久吉なども、日本博物学同志会初期からの会員で、植物採集登山記を『博物之友』に寄稿している。

- ⑤ このあたりの明治三〇年代の登山の様子は、安川茂雄『近代日本登山史』（一九六九年六月三日／あかね書房）などに詳しい。

- ⑥ アームチェア・トラベルの想像力を問題化した研究には、藤森清『明治三五年・ツーリズムの想像力』（小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』所収／一九九七年五月三日／小沢書店、五井信「書を持って、旅に出よう——明治三〇年代の旅と〈ガイドブック〉（紀行文）——」（『日本近代文学』第六三集／二〇〇〇年一月一五日）などがある。

- ⑦ 春陽堂広告（『新小説』第一一年第八号／一九〇六年八月一日）

- ⑧ 「新刊紹介」（『都新聞』／一九〇五年七月一五日）

- ⑨ 例えば明治三八年刊行の『不二山』（本文前出）には三宅克己と中沢

弘光、『山水無盡蔵』には丸山晚霞の水彩画が挿入されている。

- ⑩ 正岡子規「叙事文」（『日本』附録週報／一九〇〇年一月二九日、同年二月五日、同年三月二日）

- ⑪ 中島国彦は「明治期紀行文の文学表現——小島鳥水の昇仙峡紀行を中心に——」（『資料と研究』第一輯／一九九六年三月一五日）で、鳥水の「写生」論に子規の影響があると推測している。

- ⑫ 文芸批評における「地方色」「ローカル、カラー」という用語については、改めて論じる必要がある。同様の問題を扱った研究には、中根隆行「語られる青年文化（地方、自然主義現象）（筑波大学近代文学研究会編『明治期雑誌メディアにみる〈文学〉』所収／二〇〇〇年六月三〇日／筑波大学近代文学研究会）などがある。

- ⑬ 田山花袋『通俗作文全書第二四編』小説作法（一九〇九年六月三日／博文館）

- ⑭ 「新刊」（『日本』／一九〇六年八月一日）

- ⑮ 「山水無尽蔵」（『新古文林』第二巻第一〇号／一九〇六年八月一日）

- ⑯ 佐々木基成は「紀行文」の作り方——日露戦争後の紀行文論争——（『日本近代文学』第六四集／二〇〇一年五月一五日）で、酔夢による紀行文の「内容」についての整理・分類に注目し、紀行文と小説との決定的な差異が見出しにくいことを指摘している。

- ⑰ 鳥崎藤村は「雲」（『天地人』第四〇号／一九〇〇年八月二日）において、ジョン・ラスキンの論を援用した雲の描写を試みている。

- ⑱ 田山花袋前掲書（注⑬）

- ⑲ 科学と文学の融合を標榜した同時代の試みとして、この他に前田曙山の『高山植物叢書』（第一巻：一九〇七年六月一〇日、第二巻：一九〇八年一月二六日／いずれも橋南堂）があげられる。曙山は第一巻「緒言」で、同書の狙いが「文学と科学との趣味を調和し（略）無趣味の科

学をして、読んで面白く」することあるとしている。

⑳ 『哀鳥「雲表」』（「文庫」第三四卷第六号／一九〇七年八月一五日）

㉑ 例えば、寒川鼠骨『写生文其法』（一九〇三年五月一三日／内外出版協会）では、第四章「写生文の種類」において、「日記紀行類」が写生文の低位ジャンルとして分類されている。

㉒ だが紀行文という奇妙なジャンルは、曖昧なまま現代まで生き残っている。この点については別に論じる必要があるだろう。

㉓ 『楳ヶ嶽乃美観』については、和田敦彦が「読むことと登ることの間で【読書と山岳表象の近代】」（『環』Vol. 14／二〇〇三年七月二〇日）で、明治以降の登山が言葉によって書かれることで分節化され、「近代化」されたことを例証するものとして取上げている。

㉔ 明治三十九年三月の「山岳」創刊以後、烏水が紀行文を発表する場は「文庫」から次第に「山岳」へと移行していく。明治四〇年刊行の紀行文集『雲表』（本文前出）では、収録された紀行文八篇のうち、「文庫」初出のものは一篇、「山岳」初出のものは三篇となっている。

〔附記〕 文章の引用にあたっては読み方の難解なもの除いてルビを省略した。また、旧漢字は原則として新漢字に改めたが、「鎗ヶ嶽」など同時代において新旧の漢字が使い分けられている固有名詞などの場合に限り、旧漢字を用いた。